宗尊親王の和歌

――実感実情歌を中心に――

中山伸子

序

宗尊親王は、仁治三（一二四二）年、後嵯峨天皇の第一皇子として生まれた。母（平棟元女棟子）の出自のため立坊はせず、建長四（一二五二）年、十一歳で元服した後、幕府に請われて関東に下向し、第六代征夷大将軍となる。文永三（一二六六）年、幕府に対する謀反の嫌疑により将軍を廃せられ帰京、同九（一二七二）年二月に父法皇の崩御を機に出家し、同十一年（一二七四）年に三十三歳の短い生涯を閉じた。

この薄幸な皇族将軍は、和歌を非常に好んだ。親王の和歌は、多くが後世に残されている。しかし、従来は、

入江にはかもぞなくなるかつしかのままのうら風さむくふくらし

（『柳葉和歌集』より）

などの万葉風の歌を多く詠んだことでは注目されていたものの、一般に注意を引かれなかったようである。

しかし、親王の和歌を読むとき最も注目されるのは、万葉風とは少し趣が違う、実感実情を率直に詠んだ歌が非常に多いことであると思う。親王の和歌については、和歌そのものの優劣よりも、歌の背景にある親王の「人間性」と歌風との関係を探ることに興味を感じるのである。

本稿では、親王の和歌を、将軍時代・将軍更迭事件直後・晩年の三期の詠に分け、それぞれの時期における親王の心境を考え合わせながら、その独特の歌風を考察し、親王にとって和歌とはどのようなものであったのかを探っていきたい。

なお、テキストには、新編国歌大観七巻私家集編Ⅲ（角川書店）所収の『柳葉和歌集』『瓊玉和歌集』『中書王御詠』『竹風和歌抄』を用い、和歌の引用は全て、これによる。

第一抄　将軍時代の和歌

(一)

親王の鎌倉将軍時代の和歌資料としては、散佚した『初

心愚草』を除くと、次の三つがある。

一、『三百首和歌』　文永元(一二六〇)年十月以前の成立

二、『瓊玉和歌集』　文永元(一二六四)年成立

三、『柳葉和歌集』　文永三(一二六六)年前半期の撰か

このうち、『瓊玉集』は、五〇七首のうち、『三百首和歌』『柳葉集』と二六一首一致しており、文応元年頃から文永元年まで(親王十九歳から二十三歳)およそ四年間の秀歌選と考えることができる。したがって第一章では、『瓊玉和歌集』の五〇七首を資料としてとりあげることにしたい。

(二)

宗尊親王の和歌は、細川幽斎の『聞書全集』に、

宗尊親王はさしも歌口にておはせしを、つねに為家卿御風體悪しきの由いさめ申されしなり。果して世に用ゐられぬ。

とあるように、京都歌壇の人々にはあまり認められていなかったようである。また、『正徹物語』に、

宗尊親王は四季の哥にも、良(やと)もすれば述懐を詠み給ひしを難に申しける也。

とあり、親王の和歌の特徴である、題詠であっても述懐を露わに詠みこんだ歌が多いことは、当時の歌人達の作風と大いに相違していたことを示している。例えば、

68　惜花といふことを
　聞きそめし昔さへこそうかりけれうつろふ花のをしきあまりは

115　夏御歌の中に
　待ちわびし時こそあらめ郭公聞くにも物のかなしかるらん

220　和歌所にてをのこども結番歌読み侍りける次に
　うくつらき物なりけりな深くる夜の月の空行く秋のむら雲

など、四季の部において、「うし」「つらし」「かなし」などの語を使った歌が、『瓊玉集』にも少なくない。皇子であり、高い地位にあり、しかも最も多感な二十歳前後の青年の詠にしては、厭世的な心情がしばしば和歌に表現されており、その独特の歌風は注目に値するのである。

『瓊玉集』五〇七首について、「うし」「つらし」「かなし」などの悲哀を表す語の使用数を調べると、表1のようになる。また、表1の四語のほか、「さびし」が一五語、

涙	かなし	つらし	うし	
0	6	6	12	春(95)
1	1	1	3	夏(48)
17	6	5	19	秋(129)
2	1	0	1	冬(47)
8	5	12	11	恋(89)
1	6	3	21	雑(99)
29	25	27	67	計(507)

表1　瓊玉和歌集

涙	かなし	つらし	うし	
0	2	0	1	春(132)
0	2	0	2	夏(47)
0	4	1	1	秋(132)
0	3	0	1	冬(96)
3	2	0	2	恋(156)
3	6	0	4	雑(156)
6	19	1	11	計(719)

表2　源実朝・金槐和歌集

「うらむ」が一三語、「いとふ」が一〇語、「なげく」が八語使われている。

また、宗尊親王が、その歌風や、悲運の将軍という境遇の類似性からしばしば比較される源実朝の『金槐和歌集』について、同様に調べてみた（表2）。どの語についても、『瓊玉集』に比べると、非常に少ない。特に四季の部においては、歌数に対する、四語の総数の割合が『金槐集』は四％、『瓊玉集』は二五％である。親王が、悲哀を表す語をいかに多用したかがわかる。

次に、親王の述懐の歌を具体的に挙げて、考察していく。

三月尽を

95　さだめなきうき世にも似ぬならひかな日をかぎりける春の別は

朝顔を

171　はかなしと何かはいはむ世の中はかくこそ有りけれあさがほの花

をのこども、題をさぐりて歌よみ侍りけるに、時雨を

283　身にしれば しぐるる雲ぞあはれなる空もうき世やかなしかるらん

これらの歌は四季の部におけるものであるが、全てに共通しているのは、「世」の語が使われていることである。その「世」とは「うき世」であり、「さだめなし」「はかなし」などの語とともに詠まれている。「春の別」「あさがほの花」「時雨」を詠んだ歌であるのに、「うき世」を嘆く気持を、同じ比重で詠んでいるように思われるのである。このような作風こそ、『正徹物語』において指摘された歌風と言えるだろう。

『瓊玉集』において「うき世」の語は一〇語使われている。また、「世の中のうき」「世の中のうし」が合わせて四例、「世のうさ」が三例、「よの中をあなうと歎く」が一例ある。親王が、この世を憂きものと見なしていたことが、充分想像できる。

和歌所にて

193　ながむればただ何となく物うくて涙こぼるる秋の空かな

雑御歌中に

484　よの中をあなうと歎くことしあればまづこぼれける我が涙かな

人人によませさせ給ひし百首に

495　いかにみて思ひさだめむうつつとも夢ともなきは此世なりけり

このように、「よの中をあなうと歎く」親王は、「夢のうき世」を生きるわが身を次のように詠んでいる。

五十首御歌中に

192　さのみやはうき身のとがにかこつべき秋のけしきのさそふ涙を

述懐廿首御歌に

470　うきも又我が身のとがに歎くかな世のことわりに物忘して

どちらも「とが」の語が使われている。身分も地位も高く、何不自由なく暮らしているはずの親王であるのに、わが身のすべてを逃れられない宿命と思い、諦めようとしており、その気持の表れが「うき身のとが」という表現であるように思われる。

㈢

次に挙げる歌には、宗尊親王がしばしば用いた「うし」「つらし」などの語は使われていないが、親王の当時の心境がよく表れていると思われる。

461　有りて身のかひやなからん国のため民のためにと思ひなさずは

462　心をばむなしき物となしはてて世のためにのみ身をやまかせむ

これらの歌からは、親王の立場を推察することができる。それは、北条氏が実権を握っているため将軍とは名ばかりのむなしい立場である。『増鏡』（内野の雪）に、

さても、院の第一の御子は、（略）当代生まれさせ給ひにしのちは、おしけたれておはしますに、建長元年、后腹に二の宮さへさしつゞき光り出で給へれば、いよ〳〵いまは思ひたえぬる御契りのほどを、わたくし物にいとあはれと思ひきこえさせ給ふ。源氏にやなしたてまつらましなどおぼすも、なほあかねば、たゞ御子にて、東の主になしきこえてんとおぼして（略）

とあり、親王の父後嵯峨院は、皇位の望みのない愛児の幸福を考え、親王を将軍として関東へ送ることを決めたことがわかる。しかし、このとき十一歳という年少であった親王も、鎌倉で毎日を過ごすうちに、執権北条氏の飾りでしかない将軍としての立場を敏感に感じとっていたのであろう。

このように、親王の嘆きは、しばしば自分自身へと向けられている。『瓊玉集』において、自己・自身を表す語に注意すると、「われ」の語が五語、「わが」二〇語（「わが身」九語を含む）、「身」二一語（但し、「わが身」は除く）など、多く見出される。特に、「身」は、「うき身」五語、「晴れがたき身」「たのまれぬ身」「あはれなる身」各一語など、悲しい身の上を連想されるものが多い。

わが身を嘆きがちな親王の歌には、出家への憧れを詠んだものがある。

出家を

448　ことしげき浮世のまぎれ打ちすててすまばや山の奥の庵に

人人によませさせ給ひし百首に

453　山里もすみうく成りぬいづち又あくがれそむる心なるらむ

しかし、親王が出家したのは、これらが詠まれてから十年ほど後の文永九年、父後嵯峨院崩御の直後である。将軍時代の親王が本気で出家を考えていたとは思われない。

題しらず

467　山ふかくすまむとまではなけれども事しげきよをよ

そにきかばや

おなじ十首御歌に

476 いとひても後をいかにと思ふこそ猶世にとまる心なりけれ

雑御歌中に

480 すつとても憂身ひとつは惜しからず人の情に思ひわびぬる

俗世を離れたいという気持がなくはないのだが、「山ふかく」引きこもってしまおうというほどではない。「後をいかに」と思う気持ちや、「人の情」に、どうしても心が引きとめられて、やはりこの世にまだ未練がある。このような心情のほうが、親王の本音だと思われるのである。

(四)

以上のように、鎌倉将軍時代の宗尊親王の和歌を見てきたが、親王の実感実情歌からは、彼の人物像が浮かび上がってくる。

親王の厭世思想は、何か具体的な出来事によるものではなく、彼の性格によるところが大きいと考えられる。確かに、後嵯峨帝の第一皇子として生まれながら帝位につけなかったこと、将軍として関東へ下向したものの、実権を握ることはできなかったことなどは、世の中やわが身をしきりに嘆いた原因と考えられなくもない。しかし、それらが直接の原因というよりも、自分を取り巻く人々や、世間の空気に非常に敏感で神経質な性格によって、親王の厭世思想は形作られたと思われる。したがって、将軍時代の親王は、世の中を「うし」と嘆くのも、「うき身のとが」と諦めるのも、出家に憧れるのも、自分自身の心の底からわき起こった心情によるもので、自己の外側には、はっきりとした原因はないのである。

第二章　将軍更迭事件直後の和歌

(一)

文永三年七月、宗尊親王は将軍を廃せられ、鎌倉を追放された。将軍更迭の理由は、「将軍御謀反」ということであったが、この事件は、青年将軍に成長した宗尊親王が反得宗勢力と結びつくのを恐れた北条氏の断行によるもので、親王自身には幕府に対する異図はなかったと思われる。執権の座を死守しようとする北条氏にとっては、青年将軍の排除は必要不可欠なことであった。(注1)

親王の運命を一転させたこの事件直後の和歌には、無実の嫌疑を受けて鎌倉を追放された親王の苦悩が、はっきりと表れたものが多い。本章では、その文永三年後半期の和歌を考察していく。文永三年以後の詠を収載する親王の家集には、次の二つがある。

一、『中書王御詠』　文永四(一二六七)年十二月の成立

二、『竹風和歌抄』　文永十(一二七三)年か十一年の成立

考察にあたって、『竹風和歌抄』巻一(文永三年十月五百首歌)一〇四首と、巻三(文永三年八月百五十首歌)の二八八首、そして、『中書王御詠』所載の、文永三年後半期の詠と思われる三〇首(注2)の計四二二首を対象とする。

	うし	つらし	かなし	涙
竹風歌抄 巻一 (288)	51	14	7	17
〃 巻二 (104)	9	3	3	7
中書王御詠の対象歌 (30)	7	0	0	4
計 (422)	67	17	10	28

表3

㈡ 対象とする四二二首について、『瓊玉集』と同様に心情語の数を調べると、表3のようになる。「うし、つらし、かなし、涙」の四語は計一二二語で、歌数に対する割合は二九%、『瓊玉集』の場合と同じである。悲哀の気持を直接に表すこれらの語の使用数が、不幸な事件を体験する以前と、体験した後で変化がないということは、このような心情語を和歌に用いるのは、もともと宗尊親王の作歌の特徴であったと言える。また、『瓊玉集』では使われていないが、『竹風和歌抄』巻一・巻三では見出される語に、「うれふ」（一六語）「泣く」（八語）がある。どちらも動詞であるから、将軍を廃せられた親王の嘆き悲しむ姿を彷彿とさせる、と言えるかもしれない。しかし、悲哀を表す動詞は、「うらむ」「いとふ」「なげく」などの心情語が、『瓊玉集』にも見出されるので、必ずしも事件直後の詠に特徴的なものとは言えない。

そこで、語数だけで比較するのではなく、それぞれの語を使った和歌そのものを比較してみたい。

① 「うらむ」

A――『瓊玉和歌集』

人人によませさせ給ひし百首に

83 散りはてて後こそ花はかなしけれ待ちこし程をなに恨みけむ

旅宿月といふ事を

426 都思ふたびねの夢のさめぬまに恨みやしつる秋のよの月

B――『竹風和歌抄』巻一・巻三

述懐

131 ことのはもおよばばこそはうらみてもなきても人に身をばうれへめ

不恨

164 かかりけるむくひもおのがつらさにて身をこそなげけよをば恨みず

Aでは、「待ちこし程」「秋のよの月」などを「恨む」対象としており、単に何かを嘆くという意味に近いようである。それに対してBでは、少し意味合が違うと思われる。明らかに、親王が世の中や他人に対する不信感を抱いていることが推察されるのである。

② 「いとふ」（省略）

③ 「なげく」

A

百番御歌合に

232 うき事の身にそふ秋となげきても猶うとまれぬよは

の月かな
此日已過即哀滅
418 はかなくも暮れぬとばかり歎くかないのちしらする
鐘のひびきを

B

萩

203 なげくかな秋にはあへず色かはる萩の下ばを身のたぐひとて
春日

262 哀とやさすがに神もみかさ山ふりさけ空になげくこころを

この場合、AとBでは、明らかに「なげく」対象が異なっている。Aでは「秋」「鐘のひびき」を嘆き、Bでは「萩の下ば」（わが身の類別）「わが身」（262の歌は、ふりさけ空に向かってわが身を嘆く私の心を、さすがに神もあはれとごらんになるだろう、という意ととる）を嘆いている。つまり、Aは二首とも「なげく」対象は自己の外側のものであるのに対して、Bでは自分自身なのである。

「うらむ」「いとふ」「なげく」を用いた和歌について見てきたが、Aでは自己の外側のものを対象とした場合が多く、Bでは、わが身や無常な世の中を恨み、嘆いているものが多い。心情語の使用数を見ただけでは、AとBではほとんど変わらないのだが、よく比較してみると、このような変化が見られるのである。

次に、「うれふ」「泣く」の語を用いた和歌を見ていく。

④ 「うれふ」

綾

178 ながめつつけふもむなしく呉羽どりあやまたぬ身を
空にうれへて
大原野

263 をしほ山松にうきみやうれへまし神代もかかるため
しあらじな

「うれふ」は、
「嘆く」に比べ、他人に訴えようとする目的を持つ点で異なる（角川最新古語辞典）
ということであり、将軍時代は内へ内へと向けられていた親王の嘆きは、ここで変化を見せていると言えるだろう。無常の世とうき身をはっきりと証明するような出来事を体験して、親王はやはり動揺している。「この世はやはりさだめなきものだ」と悟ったような心境には至っておらず、「あやまたぬ身を空にうれへて」と無実を訴え、「神代もかかるためしあらじな」と、わが身にふりかかった不幸を嘆いているのである。このように見ていくと、厭世的な考え方をしてはいても、自己の外側にその確たる原因がなかった将軍時代の詠に、自己の外側に嘆く気持を訴えかける「うれふ」の語が見出されないのは当然だと言えるのではないだろうか。

⑤ 「泣く」

五日

16 あやめ草たもとにかけし時だにもしらずよながきね

になかんとは
鶯
236　いまはわれ物うかる身と成りはてて鶯の音になかぬ
日はなし

どちらも「ねになく」（声をあげて泣く）と使われており、親王の深く悲しむ姿を感じさせる。16の歌は、世の無常と、昔の栄華を絶対のものと思っていた浅はかな考えを嘆いているものと読みとれる。また236の歌は、「なりはつ」の語から強い自嘲の気持が読みとれるのである。

「ねになく」という語を用いたこの二首は、将軍時代の和歌のように、「うしつらし」とつぶやいてため息をついているようなものと違い、悲しみを外に表していることがわかる点で、「うれふ」の語を使った和歌と同じだと言えるだろう。

㈢

次に、親王の和歌に用いられた語で、将軍時代と将軍更迭直後とでは特に語数が大きく異なる「身」の語を通して、親王の和歌を考えてみたい。

一章で述べたように、『瓊玉集』五〇七首において見出された「身」の語は、「わが身」九語を含む三〇語（歌数に対する割合約六％）であった。ところが、『竹風和歌抄』巻一、巻三の三九二首では、九五語（同約二四％）見出され、『中書王御詠』の対象歌三〇首では、一〇語（同約三三％）見出される。もともと自意識の強い性格であったのが、事件後は、より強く自己の存在を意識するようになり、それが「身」の語を多用するということで和歌に表れたと言えよう。

都
105　またれこし都はおなじみやこにてわが身ぞあらぬわ
が身なりける
女郎花
205　しひて猶哀とぞ思ふ女郎花わがみうつろふ秋はうけ
れど

『竹風和歌抄』によるこれらの歌は、「わが身」と、はっきりと自分自身のことを表現しているだけに、「わが身ぞあらぬわが身」「わが身うつろふ」といった表現が、切実に響いてくる。ここで「わが身」というのは単に「私」という意味だけでなく、自身の地位、立場など、境遇を引っくるめての意味であることがよくわかる。

また、親王の立場の変化を思わせる歌には次のようなものもある。

苔
193　苔のしたといはぬばかりぞ世中にあるかひもなくう
づもるる身は
伊勢
257　いすず川同じながれにしづむ身をいかが哀と神も見
ざらむ
（『竹風和歌抄』）

「うづもるる身」「しづむ身」、どちらも、地位と名誉を失った親王の身の上を示すものである。これらの表現から、

以前はわが身は栄えていたという意識が、当然あるものと思われる。将軍時代から厭世思想を歌に詠み、出家への憧れまでもほのめかした親王であるのに、この嘆きようは、少々過剰とも思われるほどである。無実の嫌疑を受けたわけであるから、述懐を詠んだ歌の中に、

雑神祇

592　やほ万神てふ神よあはれしれためしもあらじかかる無き名は

（『竹風和歌抄』）

などの無実を訴える歌があるのは、納得できる。確かに、突然将軍をやめさせられた直後のことで、動揺を隠しきれないということもあるだろう。しかしながら、

昼

43　久かたの天つ日かげの半ぞらにかたぶかぬ身といつ思ひけん

（『竹風抄』）

この歌に表れた心情は、「うき世」「うき身」を嘆きがちだった親王の心境とどう結びつくのかと疑問を感じる。

ところで親王は、いわば周囲の人々に裏切られた形で鎌倉を追放されたものの、過ぎ去った鎌倉での日々を懐しむ歌を詠んでいる。

里

106　今は身のよそに聞くこそあはれなれむかしはあるじ鎌倉の里

雑里

555　十年あまり五年までにすみなれて猶わすられぬ鎌倉の里

（『竹風抄』）

名ばかりの将軍として、むなしさを日々感じてはいても、やはり鎌倉では親王は「あるじ」だったのであり、十五年という月日（十一歳から二十五歳までの、いわば青春時代）を過ごした鎌倉は、親王にとって、懐しく思い出すだけの価値があったのである。

（四）

このように見ていくと、まず、一章で述べた将軍時代の親王の厭世思想は、自己の外側にこれといった原因がない、ということの裏づけがなされるのではないだろうか。つまり、「うし」「つらし」と世の中やわが身を嘆いたのは、自意識の強い、多感な青年の感傷であったことがわかるのである。その証拠に、今述べてきたように、親王は将軍職を追われるやいなや、「こんなことになるとは思いもよらなかった」と、無常な世と落ちぶれたわが身をうれえており、また、自らを「むかしはあるじ鎌倉の里」と詠んだように、飾りの将軍ではあっても、鎌倉での地位をゆるぎないものと心の底では考えていたと思われる。

親王の和歌は、つらい事件を体験して作風が少し変化したとも言えるが、将軍時代は、感傷的で漠然とした実感実情歌を詠んでいたのが、思わぬ出来事に動揺して、より露わに本音をさらけ出したというほうが、的確だと言えるのではないだろうか。

第三章　晩年の和歌

(一)

無実の嫌疑を受けて帰京させられ、父母との対面も許されないまま数か月を過ごした親王であったが、文永三年十一月には疑いも晴れ、幕府より領地を献じられて平常の生活を回復した。それから六年後の文永九年二月、父後嵯峨法皇の崩御を機に出家した親王は、その二年後、三十三歳の短い生涯を終える。本章では、親王の晩年の和歌を考察し、その独自の歌風の成長ぶりを見ていきたい。なお、考察にあたって、『竹風和歌抄』巻四（文永六年四月廿八日百首歌九八首、文永六年五月百首歌六八首）と、巻五（文永六年八月百首歌六八首、文永八年七月百首歌九八首、文永九年十一月百首歌九三首）の計四二五首を対象とする。

(二)

晩年の歌における心情語の数は、表4のようになる。四語の歌数に対する割合は二二％で、将軍時代、将軍更迭直後（ともに二九％）よりもやや低いが、四季の歌に少なからず見出されるなど、傾向は同じであるので、大きな変化はないと考えてよいだろう。

ところで、将軍更迭事件直後の和歌に多用された「身」の語は、『竹風和歌抄』巻四・巻五においては四六語見出され、歌数に対する割合は約一一％である。事件直後（約二五％）に比べると、かなり低い。これは、親王が精神的に落ち着いたため、常に自分自身を見つめていたこれまでの態度を、少し改めたと言えないだろうか。また、「うれふ」「泣く」の語をほとんど使っていないのも、事件後三年以上経って、喜怒哀楽（親王の場合、ほとんど「哀」の情であるが）を積極的に和歌に詠みこむほど激しい心の動揺はなくなったのだと言えないだろうか。

	うし	つらし	かなし	涙
竹風歌抄巻四（166）	20	8	6	4
〃巻五（259）	33	7	9	15
計（425）	53	15	15	19

表4

というのも、親王の晩年の和歌を読むとき、風景を写実的に詠んだ、鮮明な印象を与える歌に、しばしば注目されるからである。

651　いせ島やおなじ渚の玉とみてあられをひろふ冬のあま人

670　たび人の岩ねの枕おきわかれ苔の露ふむしののめのそら

673　ゆふ塩のたかしの浜に風あれて松の梢にかかるしら浪

どの歌も、雄大な風景が目に浮かぶようにさえ感じられるものである。そしてこれらの歌は、作者である親王の存在を感じさせない。言い換えれば、親王の感情が詠歌に表れていないのである。しかし、だからこそ、親王の当時の心境を察することができるのではあるまいか。心静かに毎日

を過ごしているからこそ、作歌の題材を自己の外側にも求めて、遠くに広がる景色に目を向け、その光景をありのままに詠んだと思われるのである。そうして詠まれた歌には、親王の人間的成長とともに、歌風の成長が認められると言えよう。

909　さのみ又漕ぎはかへらじおなじ江のたななし小舟風にまかせて

一見何気ない風景を詠んだようなこの歌は、風にまかせて漂い、二度と漕ぎ帰らないであろう棚無し小舟を、世のあるがままに身をまかせて過ごすわが身に例えているものと言うことができるだろう。晩年には、このように、あからさまな表現をせずに暗示的に何かを訴えかけてくる歌もみられるのである。

落花

949　はなさそふ四方の嵐も哀れしたのむかげなき春の木のもと

草

1002　いかにせんたのみし松のかれしよりひとり露けき陰の下草

いずれも、出家後の詠である。出家後の詠の特徴は、

天

973　朝夕にむなしき空をながめてもたかく仰ぎし君を恋ひつつ

などに代表される、亡父後嵯峨法皇を恋う歌が多いことである。この歌は率直な表現がなされているが、前に挙げた二首はそうではなく、「たのむかげなき」「たのみし松のかれしより」などの表現が、敬愛する父を失った悲しみと、人の命のはかなさを暗示しているように思われる。親王は、将軍時代から出家への憧れを歌に詠みながら、つらい出来事（将軍更迭）を体験してもこの世への執着を絶ち難く、出家の願望とためらう気持の間を揺れ動いていた。そんな親王の気持を、ただちに出家へと駆り立てたのが父の死という出来事だったのだから、その悲しみの深さは計り知れない。しかしながら、親王は、昔の感傷的な青年ではない。様々なことを体験し、ようやく平穏な心境に至り、今では俗世を捨てた身である。以前からそうしてきたように、率直に悲しみを表現する歌も詠みながら、叙景の歌にも心情を暗示するまでに、その歌風は成長していたと言えるだろう。

結び

以上、宗尊親王の和歌を、主に実感実情歌をとりあげて考察してきた。第一章では、初期の詠歌とそこに表れた厭世思想を見ていき、親王の生涯にわたる和歌を貫く特徴が、既に形成されていることを確認した。第二章では、親王の運命を変えた将軍更迭事件直後の詠を将軍時代の詠と比較し、突然の出来事に対する親王の動揺が和歌に表れていることを明らかにするとともに、第一章で述べた厭世思想が単なる青年の感傷であり、観念的なものであったことの裏付けをなした。第三章では、親王の和歌はこれまでと同様

の歌風を保ちながらも、晩年の心の落ち着きが見られるような傾向も表れ、そこには親王自身の人間的成長とともに、歌風の成長が見られると述べた。

それでは、このような歌風から見て、親王にとっての和歌とは、いったいどのようなものであったのだろうかと考えるとき、まず思うのは、いわゆる「詩歌の遊び」というのとは、少し違うのではなかったかということである。しかし、最初は「父母の膝下を離れている淋しさを紛らわす意味も込めて和歌の世界に眼を向け始めた」[注3]のであっただろうし、勅撰和歌集に収められているような、京都歌壇の人々にも認められている歌や[注5]、本歌取の歌も詠んでいるようで[注6]、「遊び」の要素も、もちろんあったに違いない。とは言うものの、詠んだ当時の作者の心境、周囲の状況などが細かく推測できる歌がかなり多い親王の家集は、あるいは随筆か日記の類と趣が似ているようにも思えるのである。つまり、親王にとっての和歌は、つれづれをなぐさめるものとしての「遊び」であると同時に、心の内をさらけ出す手段であったと言えるのではないだろうか。心の内をさらけ出すのは、京都歌壇に認められなかった理由であるが、何故あえてそのような歌を詠んだのかについては、樋口芳麻呂氏の指摘が非常に的確であると思われる。

皇族であり、将軍であるという身分、地位の尊貴さは、京都の重代の歌人のように和歌の伝統に繋縛されて身動きのとれない窮屈さから解放されているし、また粗野な関東武士のように、都の歌風に盲目的に追随する必要を認めなかったのである。

皇子として生まれながら帝位に着けなかった親王は、関東で長年暮らしたことや早世したこともあろうが、弟である後深草院や亀山院に比べると『増鏡』などにも記述は少なく、歴史的にはあまり知られていない。そんな中で、その「人間性」を今日詳しく知ることができる格好の資料であるという点で、宗尊親王の和歌には非常に価値があると言ってよいのではないだろうか。

注1　「（略）幕府の疑惑を招きそうな事態がいろいろと生起したかと思われるが、一面、時宗らがすこぶる神経質であったことも否めない。得宗が権力を保持し続けるためには、反対派の動向に細心の注意を払い、未然につぶしてゆく心構えが不可欠であったのであろう。」（樋口芳麻呂「宗尊親王の和歌　―文永三年後半期の和歌を中心に―」）

注2　配列番号95 150 151・212～230・337～344、注1の樋口氏の分類による。

注3　『本朝皇胤紹運録』によると、文永九年二月十七日に後嵯峨法皇御。同年二月三十日に宗尊親王は出家。

注4　樋口芳麻呂「宗尊親王初学期の和歌―東撰和歌六帖所載歌を中心に―」

注5　飛鳥風河音深けてたをやめの袖にかすめる春のよの月（『続古今集』『三百首和歌』『瓊玉集』所載）など。

注6　年月はうつりにけりな古郷の都もしらぬながめせし

まに（『瓊玉集』所載）など。

参考文献

●山岸徳平「宗尊親王と其の和歌」『国語と国文学』昭22・12

●石田吉貞「鎌倉文学圏」『国語と国文学』昭29・10

●樋口芳麻呂「宗尊親王初学期の和歌—東撰和歌六帖所載歌を中心に—」『国語国文学報』第二十二集　昭43・3

●樋口芳麻呂「宗尊親王の和歌—文永三年後半期の和歌を中心に—」『文学』昭43・6

●谷山茂「宗尊親王の文応三百首と未刊百首上下」『女子大国文』昭50・12、昭51・6

●樋口芳麻呂「廃将軍の悲歌上下」『短歌』昭55・9、10

●樋口芳麻呂「『中書王御詠』考」『中世和歌とその周辺』山崎敏夫編　笠間叢書　昭55・4